沼津市
明治史料館通信

1987.4.25（季刊 年4回発行）Vol.3 No.1 通巻第9号

江原素六とその周辺〈6〉

川村清雄

江原素六の妻縫子の弟（実は従弟）川村清雄は、日本洋画界の先駆者のひとりとして、美術史上にその名を残している。以下、彼の略歴を紹介したい。

嘉永五年（一八五二）に幕臣川村帰元の子として生まれた。祖父川村就修（清兵衛・対馬守・壱岐守）は、初代新潟奉行や堺奉行・大坂東西町奉行・長崎奉行などをつとめた人である。

少年時代にすでに開成所で川上冬崖から洋画を学んでいたが、維新後静岡に移住したあと、明治四年（一八七一）に静岡藩派遣の留学生としてアメリカへ留学したところから、彼の洋画家へ

江原素六の遺品中から発見された川村清雄の作品
（タテ330㎜×ヨコ235㎜）

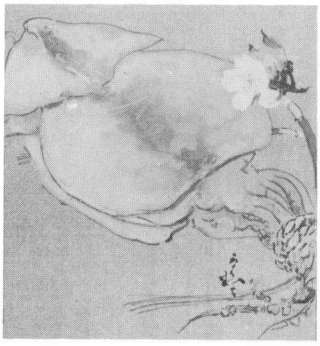
川村　清雄
（明治15年ころ）

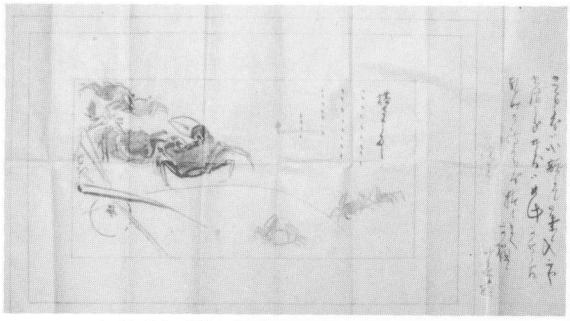
の道が開かれた。アメリカで画家としての天分を見い出された彼は、本来の留学の目的であった法律研究を変更し、本格的に絵を学ぶことを決心して、ヨーロッパに渡ったのである。そしてイタリアのベネチア美術学校に入学し、八年間にわたり修学に励んだ。

明治十四年（一八八一）帰国。ベネチア風の明るい画面などで日本の洋画界に新風を吹き込んだといわれる。明治二十二年（一八八九）には、浅井忠・松岡寿・小山正太郎らとともに明治美術会を創立し、その解散後も明治三十五年（一九〇二）に五姓田芳柳・東城鉦太郎らと巴会を結成するなど、洋画の発展に寄与した。

代表作には、「少女像」（東京国立文化財研究所）・「洗濯婦」（東京芸術大学）・「画室」（焼失）・「福沢諭吉像」（慶応義塾大学）・「振天府」（明治神宮聖徳記念絵画館）などがある。静岡県内にも、「波」（県立中央図書館）・「巨岩海浜図」（県立美術館）・「本間さた像」（浜松市美術館）などがある。

昭和九年（一九三四）没。


江原遺品中の川村作品


やはり江原遺品中から発見された資料
（依頼された絵の図案を示したものらしい）

シリーズ
沼津兵学校とその人材 ⑧

沼津兵学校をめぐる画人たち

江戸時代、蘭学の勃興とともに絵画の世界においても、平賀源内・司馬江漢・渡辺華山など、西洋の写実的な画法を取り入れた先駆的な画人たちが出現した。幕末には幕府の蕃書調所で西洋画研究が本格化し、絵図調方（後画学局）が設けられ、川上冬崖や高橋由一らがその職員・生徒となった。

しかし、蕃書調所の画学とは、美術というよりも、測量術・物産学・器械学・写真術などと密接な関係にあり、実用性（特に軍事技術への応用）に重点が置かれた。

沼津兵学校でも、資業生の学科に「図画」が設けられており、教授陣に「絵図方」として、川上冬崖・小野金蔵・江原齢多郎（要人）らがいた。川上冬崖（とうがい）（寛・万之丞）は、安政四年（一八五七）蕃書調所絵図調出役、文久元年（一八六一）同画学出役といった経歴から、当時洋画研究の第一人者であった。川上は、明治元年（一八六八）十月に沼津に移ったが、同年十二月には東京に帰り明治政府に仕えたため、沼津兵学校の実際の授業開始まで在職しなかった。しかし、小野・江原そして三等教授並の榊綽らにより、図画が教えられたと考えられる。

川上　冬崖

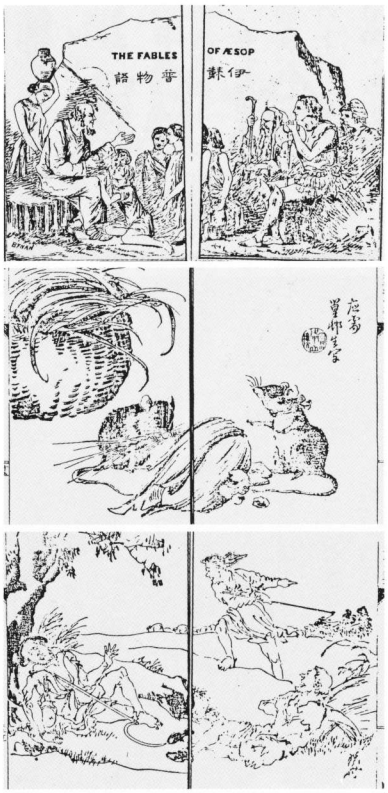
沼津兵学校の「図画」は、蕃書調所の画学以上に軍事技術に直結するものだったかもしれないが、最新の洋画技法が学校の教科として教えられたところに、先進性があった。静岡学問所のほうには、明治三年五月に学校附属絵図方として岩橋教章（幕府海軍出身で後に銅・石版画家となる）が就任しているが、短期間で離任している。

沼津兵学校にはほとんど足跡を

残さず上京した川上冬崖は、文部省・陸軍省・参謀本部などに出仕し、図学教育や軍用地図製作に携わったほか、自宅で画塾聴香読画館を開き、小山正太郎・松岡寿らの洋画家を育てた。彼は明治初期洋画界の指導者となった。

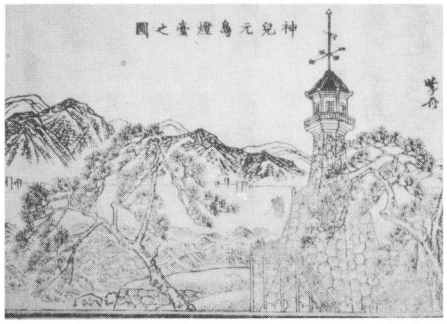
ところで、沼津兵学校と洋風画をめぐる興味深い資料に、『通俗伊蘇普物語』の挿絵がある。この書物は、明治六年（一八七三）から八年（一八七五）にかけて出版された。イソップ物語を英語版から翻訳した最初のものであり、当時ベストセラーになった。訳者渡部温は、もと沼津兵学校一等教授であり、その挿絵を描いた藤沢次謙・榊綽・河鍋暁斎の三人も沼津兵学校ゆかりの人物であった。

すなわち、藤沢次謙（梅南）は、静岡藩少参事・軍事掛として沼津兵学校の管理者であった。蘭学者桂川甫賢の子に生まれた藤沢は、幼い頃より洋風画に関心を持ち、安政六年（一八五九）に既に「フランス出征兵士図」という洋風水彩画を描いている。幕末には陸軍奉行・陸軍副総裁など軍事官僚として活躍し、維新後は静岡藩や明治政府に仕えたが、その後も画才を発揮し、『通俗伊蘇普物語』のほか、土居光華訳『母の導き』（明治七年）などにも洋風の挿絵を描いている。



▶『通俗伊蘇普物語』の扉絵・挿絵（上より、藤沢次謙、榊　綽、河鍋暁斎の画）

また、榊綽（篁邨・令輔・令一）は、沼津兵学校三等教授並だった人物である。杉田成卿に蘭学を学び、伊勢津藩に仕えた後、幕府の蕃書調所に出仕して、安政五年（一八五八）活字御用出役に任ぜられ、活版印刷技術を研究した。銀版写真や石版印刷にも先鞭をつけたほか、洋画も描いた。沼津兵学校廃止後は、陸軍省・海軍省・地理寮・修史局などに奉職した。沼津兵学校第三期資業生出身で農商務省の官吏となった片山直人が明治十年（一八七七）に出版した『山林新説』に、洋式木版彫刻の挿絵を提供したり、『小学画手本』（明治十一年）などの著書を著わしたりもした。



河鍋暁斎画『小学地理小誌』挿絵

榊　綽刻
『山林新説』挿絵

河鍋暁斎は、直接兵学校の関係者ではないが、母の甲斐氏が旧幕臣として沼津に移住していたため、明治初年一時沼津に滞在したこともあった。日本画家だったが、風刺画などもよくし、奔放飄逸なその画風で、明治画壇の奇才と称される。兵学校との人脈を示すものとして、兵学校第六期資業生加藤義質が編輯し、兵学校書記方松井甲太郎が書を担当した『小学日本地理小誌』（明治十三年）の挿絵を担当している事実もある。

河鍋　暁斎

お知らせ欄

春の歴史講演会の開催について

例年、連続講座として開催してきました明治史料館の歴史講座を、今年度は各季節ごとの独立した歴史講演会として開催いたします。

春の歴史講演会はつぎのとおり開催いたしますので、お誘い合せの上、ご参加下さい。

日時：5月24日(日)
午後1時半～午後3時半
会場：明治史料館講座室
講師：二橋正夫氏
（恵愛保育園園長）
演題：「維新史における人物と思想
～郷土の幕臣たち～」
参加料：無料

刊行図書のご案内

●「沼津市博物館紀要11」

沼津市明治史料館・沼津市歴史民俗資料館共同刊行
体裁：B5判　118ページ
内容：第1部▼「三枚橋城」瀬川裕市郎（歴史民俗資料館学芸員）▼「モノと情報」神野善治（歴史民俗資料館学芸員）▼「愛鷹・箱根山麓における先土器時代石器群の編年と小時期区分に向けての視点と問題点」▼高尾好之（文化財センター学芸員）
第2部▼「大築尚志略伝」樋口雄彦（明治史料館学芸員）
頒価：一五〇〇円（送料二五〇円）

購入のお申込みは、当館又は歴史民俗資料館まで直接来館されるか、もしくは郵便にてお申込み下さい。郵送の場合は、頒価代金に送料を加え、現金書留か、又は郵便為替に替えてお申込み下さい。

沼津市歴史民俗資料館
沼津市下香貫島郷二八〇二―一
☎〇五五九(三二)六二六六

62年度主要事業のお知らせ

●企画展「浮世絵に描かれた沼津」の開催

広重の東海道五十三次に代表される浮世絵風景画を中心に沼津・原宿を描いた浮世絵を展示し、江戸絵師たちの目を通した往時の沼津の姿を浮きぼりにします。
開催期間：8月1日～9月27日
会　　場：当館4階展示室
関連事業：8月9日(日)
記念講演会　永田生慈氏
（浮世絵太田記念美術館学芸課長）
テーマ未定
※明治史料館夏の歴史講演会を兼ねての開催です。

●小テーマ展「絵はがき」展の開催

明治から昭和にかけて、沼津御用邸に象徴されるように、保養地、観光地として栄えた沼津や郷土の姿を、当時さかんに発行された絵はがきの展示を通して探ります。
開催期間：12月20日～2月27日
会　　場：当館4階展示室

●古文書解読入門講座

9月上旬～10月上旬にかけて、連続6回の講座として開催いたします。今年は、平日夜間の時間帯を予定しています。

講師予定は市立高校友野博教頭。

●歴史講演会の開催

冒頭の記事をご参照下さい。

●図書刊行予定

▼「江原素六関係資料目録（仮称）」
▼「沼津市博物館紀要12」

特別開・休館日、無料開放日

●ゴールデンウィーク中の開館

ゴールデンウィーク中の休館日はつぎのとおりです。これ以外は開館しておりますのでご家族連れでご来館下さい。
休館日：4月30日(木)、5月6日(水)

●5月19日は無料開放日

江原素六翁の命日を記念し、この日は例年どおり観覧料を無料といたします。

また、この日午後2時から当館北方の駿河台墓地の墓前で、江原素六翁の遺徳をしのぶ記念祭が、社団法人江原素六先生顕彰会の主催でおこなわれます。

この機会に是非ご来館下さい。

●企画展展示替えのための閉室日

企画展展示替えのため、ご迷惑をおかけいたしますが、つぎの期間展示室を閉室いたします。1階図書室、2階資料閲覧室、講座室のご利用については平常通りです。
準備期間：7月25日(土)～31日(金)
片付期間：9月28日(月)～30日(水)

沼津市明治史料館通信　第9号
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372―1
☎〇五五九(23)三三三五